

### 独思録：「普天間飛行場移転問題」(12/6)

大阪府の橋下徹知事が米軍普天間飛行場の移設問題を巡り、「沖縄の基地負担軽減に、政治家として最大限の努力をしたい。全国知事会で問題提起させてもらおう。」「基地問題に関し、皆が無責任過ぎると思っていた。負担軽減について『ちゃんと受け止めますよ』という意思表示を全国の知事がやらなきゃいけない。」「沖縄の負担軽減につながる話が国からあれば、積極的に議論に参加したい。」と話し、これまでも、橋下知事は、普天間飛行場の一部機能の関西国際空港や神戸空港への移転可能性に関して、「関西空港に限らず、沖縄の基地負担軽減に資する空港は神戸空港だと思う。」と言及しています。

これに対し、神戸市の矢田立郎市長が「神戸空港は市民の利便に資する、という考えで造った経緯がある。普天間の機能を引き受けるとするのは議論する余地もない。」「他の自治体が管理運営する空港を、基地の移転先として例示するのはもってのほか。」と反論すると、橋下知事は「神戸市も兵庫県も、はなから議論を拒否して自分のことしか考えていない。神戸空港は税金で造ったのに、職員が自分たちの空港だと思っている。」と直ぐに反論を返しています。

宮本百合子のエッセイに「期待と切望」があり、

「音楽に対しては全く素人であって、しかも音楽についてはある興味をもっているものの一人として、私は日本の将来の音楽的発達について少なからず希望を抱いております。音楽上の創造力も技術も、これから十五年の後はおどろくべき進歩があるでしょう。然し、この期待の一面には、今日の音楽のおかれている複雑な社会の事情や音楽界の伝統習慣が、既に十分その困難性や多難性をも示し語っているように見えます。」

という下りで始まり、

「それにつけて、音楽批評家の任務は重大と思われませんが、率直なところ、私にはどうもよく従来の批評家というものの拠って立っている必然性がわからない。或る一つの音楽会をきいた聴衆として、一定の印象をうけてかえって翌日新聞などを見ると、ちょうど旧劇批評家の或るタイプを思わせるような挨拶のような言葉を評として発表されてある。素人は学ぶところがありません。演奏家、作曲家等は、どのような感想をもってああいう批評をよまれるのでしょうか。」

と続きます。

沖縄では、普天間飛行場だけではなく、「期待と切望」の十五年間どころか、戦後ずっと基地問題で「期待と切望」を続け、「落胆と失望」の念を味わってきています。過つての共産党党首、宮本顕治の夫人である宮本百合子が存命ならば、沖縄の「期待と切望」をどのように書いたでしょうか。

代弁すれば、

「基地問題に対しては全く素人であって、しかも基地問題についてはある興味をもっているものの一人として、私は日本の将来の基地問題解決について今回の政権交代で、少なからず希望を抱いております。基地移転上の解決方法の一つを、今日、大阪府の橋下徹知事

が提起してくれました。これから全国知事会で問題提起し、真剣に沖縄のことを考えれば、今後はおどろくべき進展があるでしょう。然し、この期待の一面には、今日の基地問題のおかれている複雑な社会の事情や政界の伝統習慣が、既に十分その困難性や多難性をも示し語っているように見えます。」

更に、

「それにつけて、政治批評家の任務は重大と思われませんが、率直なところ、私にはどうもよく従来の政治批評家というものの拠って立っている必然性がわからない。沖縄に関する一つの国会審議を傍聴した国民として、一定の印象をうけてかえって翌日新聞などを見ると、ちょうど事なかれ主義を思わせるような挨拶のような言葉を評として発表されてある。素人は学ぶところがありません。政治家、評論家等は、どのような感想をもってああいう批評をよまれるのでしょうか。」

ということになります。

確かに橋下徹知事が言う様に、心ある国民全は「基地問題に関し、皆が無責任過ぎる。」と思っています。横須賀基地から厚木基地の間を艦載機が往復するだけで、鎌倉の住民も、頭上の騒音で眠れずに頭にくることもあります。沖繩程ではありません。

丁度今、日航再建問題で明らかになった地方空港の存続問題、この問題と沖縄の基地県外移設問題とをセットで全国的に考えれば、案外、良い解決策が出てくると思いませんか？新しい空港を建設せずに解決できるかもしれません。

鳩山首相の優柔不断から、瓢箪から駒ならぬ、マニフェストどおりの県外移設の妙案が出てくることも期待できるのでは？ 真剣に検討するべきだと思います。

#### 読売：「橋下知事、普天間移設 知事会で問題提起」(12/2)

米軍普天間飛行場の移設問題を巡り、大阪府の橋下徹知事は2日、報道陣に対し、「沖縄の基地負担軽減に、政治家として最大限の努力をしたい。全国知事会で問題提起させてもらおう」と述べ、今月中に開かれる全国知事会戦略会議で提言する考えを示した。すでに知事会長の麻生渡・福岡県知事に伝え、議題に挙げることを了承されたという。

橋下知事は「基地問題に関し、皆が無責任過ぎると思っていた。負担軽減について、『ちゃんと受け止めますよ』という意思表示を（全国の）知事がやらなきゃいけない」と話した。

これまで橋下知事は、普天間飛行場の一部機能の関西空港への移転可能性に関し、「沖縄の負担軽減につながる話が国からあれば、積極的に議論に参加したい」としていた。この日は沖縄選出の国会議員らから面談を求められたが、「責任を持たない僕が軽々しく発言することは控えたい」と断ったという。



< 宮本百合子 ( 1899-1951 ) >

小説家、評論家。旧姓中條。本名ユリ。東京市小石川区(現・文京区)生まれ。日本女子大学英文科中退。

17歳の時に『貧しき人々の群』で文壇に登場、天才少女として注目を集め、その後もプロレタリア文学の作家、民主主義文学のリーダーとして活躍した。

日本共産党元委員長宮本顕治の元妻で、宮本と共に投獄、執筆禁止などを繰り返しながら活動を展開した。

著書に『貧しき人々の群』『伸子』『一九三二年の春』『乳房』『杉垣』『三月の第四日曜』『播州平野』『風知草』『二つの庭』『道標』など。



### 春秋：「ちゃぶ台返し」(12/4)

「ちゃぶ台返し」というのを一度やってみたいものだが、なかなかできずにいる。昔風のちゃぶ台があったとしても威勢よく卓をひっくり返した後の皿小鉢はどうする。ぶちまけた味噌(みそ)汁はどうなる。などと考えれば拳に及びかねよう。

ところがドラマのなかでは日常茶飯事だ。「巨人の星」の父一徹はその元祖のようだし、「寺内貫太郎一家」では小林亜星さんが毎回ちゃぶ台をけり上げていた。最近では映画にもなったマンガ「自虐の詩」の主人公イサオが何かというと「でえーい」とやる。みなさん、後片づけなど知ったことかと元気がよい。

そんなふうには見えないのだが、鳩山首相もお仲間だろうか。ガソリン税などの暫定税率廃止と同時に環境税を設けようと話が進み始めていたのに、不意にひっくり返した。毅然(きぜん)として立ち向かうならまだしも、鳩山さんの場合はグズグズ、モゴモゴしながらの静かなるちゃぶ台返しだ。かつてないタイプである。

ようやく食膳がととのってきた、というところでひっくり返してしまうのがこの政権の質(たち)かもしれない。普天間問題でも社民党の福島さんが連立離脱をほのめかしたりして収拾がつかず、年内決着断念だという。あっちでもでえーい。こっちでもでえーい。無残に飛び散るあの案この策を誰も片付けようとしない。

<小林亜星(1932-)>

作曲家、作詞家、俳優、タレントとしての多彩な才能の持ち主。

東京都杉並区出身。慶應義塾大学経済学部卒業。作曲を服部正に師事。

現在アストロミュージック所属。J-scat(日本作詞作曲家協会)理事。  
大日本肥満者連盟(大ピ連)初代会長を務めた。



CMソングやテレビ主題歌にヒット曲、ロングランの曲が非常に多く、そのメロディに日本人の多くが馴染んでいるという点では右に出るものがない存在である。

作品に『北の宿から(都はるみ:第18回日本レコード大賞)』『野に咲く花のように(ダ・カーポ:裸の大將放浪記挿入歌)』『恋待草(岩崎宏美)』『涙と微笑み(沢田研二)』『ピンポンパン体操(ママとあそぼう!!ピンポンパン挿入歌)』など。

### 天声人語：「太平洋の要石」(12/10)

まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている の書き出しで、司馬遼太郎作「坂の上の雲」は始まる。その小さな国の開化に、琉球王国は呑(の)み込まれていった。いわゆる琉球処分で沖縄県になってから、今年で130年になる。

明治政府が琉球にこだわった大きな理由は「国防」だった。唱歌の「蛍の光」はかつて4番まであり、千島の奥も沖縄も、八洲(やしま)の内の守りなり……と歌われたそうだ。先の戦争では本土を守る「捨て石」にされ、戦争が終わると「太平洋の要石(かなめいし)」になった。基地の島である。

戦後、本土は憲法9条に守られる。しかし沖縄には異なる時間が流れてきた。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、さらにはイラク戦争。基地を通じて戦争にかかわってきた。三つの世紀をまたぐ歴史の先に、いまの普天間飛行場問題がある。

米側との「返還」の合意からすでに13年がたつ。県内移設を突きつけられた当時の大田知事は、「この狭い沖縄の、どこにそんな場所があるのか」と憤った。島の多くの人々の思いでもあっただろう。

ラテン語の諺(ことわざ)に「平和を望むなら戦争を準備せよ」とあるそうだ。顧みれば本土は、自らの平和のために、戦後もずっと沖縄に「戦争の準備」の場であることを強いてきたのではなかったか。

「平和を望むなら平和を準備したほうがいい」。これは評論家の故・加藤周一さんが切り返した言葉である。沖縄の歴史と現実を沖縄だけのものとせず、考えを巡らせたい。考えの一つ一つが、ひいては「平和の準備」につながっていく。

< 司馬遼太郎 (1923-1996) >

小説家。本名福田定一。大阪府大阪市生まれ。大阪外国語学校(新制大阪外国語大学の前身、現在の大阪大学外国語学部)蒙古語学科卒業。

産経新聞社在職中、『梟の城』で直木賞を受賞。以後、俗に「司馬史観」と呼ばれる独自の歴史観に基づいて数多くの作品を執筆、歴史小説に新風を送る。



作品の多くに、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、西郷隆盛らが重複して登場し、映像化され、ベストセラーかつロングセラーとなったため、現代の日本人が持つ「彼等の人物イメージ」は司馬の歴史観に大きく影響をうけていると云われている。

代表作に『国盗り物語』『竜馬がゆく』『坂の上の雲』などがあり、戦国・幕末・明治を扱った作品が多い。また、『街道をゆく』をはじめとするエッセイなどで活発な文明批評を行った。

### 朝日社説：「普天間越年 鳩山首相は自ら道筋を」(12/4)

日米の合意は重い。基地負担を軽減してもらいたいという沖縄県民の思いにも応えたい。米海兵隊の普天間飛行場の移設をめぐる、この二律背反に苦悩していた鳩山政権にもうひとつ、重荷が加わった。

連立パートナーの社民党が、辺野古移設なら連立離脱も辞さずという方針を固めたことだ。政府は態度を決めあぐね、年内を目指していた問題の決着を先送りする見通しになった。

米政府が求めている辺野古への移設を受け入れるのか。自民党政権時代の合意であるこの案を見直し、辺野古以外を探るのか。とても難しい選択だ。

鳩山由紀夫首相は、辺野古以外の候補地も検討するよう岡田克也外相らに指示したが、いずれにしても政治的に大きなコストを伴う判断になる。

だが、方向感を示さないまま判断をただ先送りすれば、ぐずぐずと決断できない政権という、不名誉な印象が国内外に広まっていく。国民や沖縄県民もそうだろう。そして米国政府は失望し、不信を募らせるに違いない。

首相はなぜ結論を先送りするのか、もつれる諸条件の何を優先してこうなっているのかを、国民にも米政府にもはっきりと説明すべきだ。

首相は「年内じゃなければだめだと申し上げたことはありません」と語った。だが、問題は検討に時間をかければ、いずれどこかに落ち着くというほど簡単ではない。来日したオバマ米大統領は鳩山政権の苦衷に理解を示し、作業部会で検討を続けることを受け入れた。以後、岡田外相や北沢俊美防衛相は精力的に調整を進めてきた。年内決着を目指しての動きだったのはもちろんだ。

結論が日米合意の継承なのか、見直しの提起なのかはともかく、それが早期の打開を目指すとしてきた新政権としての当然の態度である。

ここに来て流れが変わったのは、社民党が辺野古案への反対を明確にしたことだ。首相は「重く受け止める」と語り、連立への配慮が判断の背景にあることを認めた。政府内では、辺野古移設を土台にした修正案で打開を探る動きがあった。だが、社民党を連立に引き留めるためには封印しようということだろうか。

参院での過半数確保を優先した判断だとすれば、普天間問題は事実上、来夏の参院選まで動かないことになる。

首相が辺野古以外の選択肢を追求する意思があるなら、それも重い判断である。政権が交代した時にそうした見直しを米国に求めるのは、欧州の同盟国でもあることだ。ただ、国内調整にも対米交渉にも時間がかかる。必要なのは、その方が日米同盟の長期的な安定に役立つという説得力のある説明だ。内政上の理由でただ先送りでは、失うものは大きい。

朝日：「日米協議「もう限界」 岡田外相、普天間解決に危機感」(12/6)

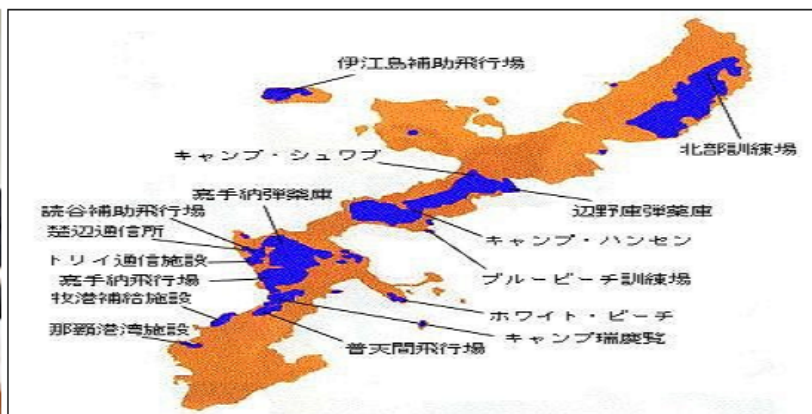
岡田克也外相は5日、那覇市で地元紙の沖縄タイムス社の岸本正男社長らと会談し、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の移設問題をめぐる日米協議について「2カ月間みっちりやってきた。もう限界だ」と述べた。鳩山内閣は年内決着を見送ったが、同県名護市辺野古に移設する日米合意の履行を求める米側の反発は強く、辺野古以外にこだわれば移設そのものが困難になるとの厳しい認識を示したものだ。

同席者によると、岡田氏は岸本氏との会談で、これまで模索してきた嘉手納基地への統合について「難しい」と表明。「(現行計画は)日米間で煮詰まっていた話。元に戻って議論とはならない」「選択肢はもうない」などと、辺野古移設を受け入れるしかないとの考えを示した。

岡田氏はこの後の記者会見で、「合意が実現できない時に(日米間の)信頼関係がどれだけ維持されるのか。日米関係の現状に、非常に強い危機感を持っている」と語った。また、問題の先送りは解決につながらないとも強調。「外相として打開しなければいけないと思っている。打開につながる決断が何か、首相を含めて協議している」と語り、ぎりぎりの妥協策を探りたい意向だ。

ただ、鳩山政権は、辺野古移設を決断すれば、社民党を含めた連立政権がもたないと判断している。新たな策を見つけるのは極めて困難な情勢で、対米交渉上、新たな移設先の検討の余地がないなら、移設問題は暗礁に乗り上げる可能性が高い。

日米作業部会に出席した米政府当局者らと4日に会った民主党関係者によると、当局者らは移設が進まなければ普天間飛行場の老朽化した施設を更新する予算措置を取る可能性を伝えた。岡田氏の発言の背景には、こうした措置が取られれば、現状の固定化につながるなどの危機感があると見られる。



### 編集手帳：「タイムリミット」(12/5)

日本銀行総裁や大蔵大臣を務めた一万田尚登（いちまだひさと）氏は言い間違いの多かった人で、一鳥二石の名案　ロード公団　プラトン輸出　などの“名言”を残している。

なかでも　一鳥二石　は、一つの政策目的のために複数の官庁が重複して仕事をするこの無駄を暗示しているかのようで、軽率から発した言い間違いとはいえ、味わい深いものがある。

自民党の元副総裁、金丸信氏の言葉も忘れがたい。「タイムリミット」(制限時間)を間違えて　タイムメリット　と言ったことがある。無理に訳せば、時間がもたらす利益、だろう。

「普天間」の年内決着を断念するという鳩山首相は、金丸造語にならえば　タイム“デ”メリット（時間がもたらす不利益）を覚悟しなくてはならない。日米首脳会談では「私を信じて」とオバマ大統領に気を持たせ、沖縄県民には県外移設もあるかのように気を持たせてきた。

米政府が手にした期待の石と、沖縄の人々が手にした期待の石は、時がたつにつれて大きくなる。裏切られたときに飛んでくる二石に身がすくんだか、優柔不断をきめこむ一鳥鳩の了見が分からない。

#### <一万田尚登（1893-1984）>

政治家、実業家。大分県野津原村（現：大分市）に生まれ。東京帝国大学法科大学政治学科卒業。

第18代日本銀行総裁、鳩山内閣と第1次岸内閣の大蔵大臣を歴任。

日銀総裁の3115日間の在任期間は歴代1位で“法王”の異名を持ち、戦後の金融界、経済界に重きを成した。

GHQの占領下、金融行政は日銀が牛耳っていたが、その後、日銀法の改正による大蔵省、また日本輸出入銀行による輸出補助金の割り当て権限を背景とした通商産業省の権能の増大に伴もない、日銀そのものの役割は薄まった。

「日本人には自動車など作れっこないのだから、自動車などすべてアメリカから輸入すれば良い」の発言で有名。



#### <金丸信（1914-1996）>

政治家。衆議院議員（12期）。山梨県中巨摩郡今諏訪村（旧白根町、現南アルプス市）生まれ。東京農業大学農学部卒業。

国務大臣・副総理、防衛庁長官（第35代）、国土庁長官（第3代）、建設大臣（第34代）を歴任。

1960年の日米安保条約改定に関する一連の騒動の際、混乱する国会の中、衆議院議長（当時）を担いで、議長席まで運び、会期延長と新安保条約可決へと繋げるたことで有名（国



ライフ誌に掲載)

1992年東京佐川急便から5億円のヤミ献金が発覚。副総裁職の辞任。東京地方検察庁特別捜査部は金丸に事情聴取のための出頭を求めたが、政治資金規正法違反を認める上申書を提出することで決着(東京簡易裁判所からの罰金20万円の略式命令)。地検は国民から凄まじい批判を受けた。

### 余禄：「普天間先送り」(12/5)

「それはここで速断せずに、もう少し煮詰めて……」。会議で問題を先送りするときの決まり文句だ。赤瀬川原平さんは著書「優柔不断術」で、これぞ狭い島国の農耕社会が生んだ知恵という。時間に仕事をしてもらうのだ。

「鍋の中でというより、一本の時間の中でぐつぐつと煮詰める。そうするとその件が、ほどよくこなれて、柔らかくなり、味がしみ込み、よくなじんで、ムリのない結論に仕上がっていく。……なんとなく結論を先送りしているうちに、……とにかくいつの間にか解決している」。

年季の入った日本人の問題先送り術である。それが政治でも通用したのは、以前なら大方の問題は先送りすれば経済成長が解決したからだ。だが今や国内問題もそうはいかない上に、ことは名うての優柔不断嫌いの米国相手の外交である。

沖縄の米軍普天間飛行場移設問題をめぐり鳩山由紀夫首相は年内の決着を見送る構えだという。関係閣僚には日米が合意している名護市辺野古に代わる移設先探しを指示したが、その背景には連立離脱をほのめかした社民党への配慮がある。

あきれるのはこの問題での首相はじめ閣僚の変転極まりない発言だ。それもこれもいずれうまく煮詰まると首相は考えているようだが、ことは過去の外交合意を見直す力業だ。米国が交渉に応じ、沖縄県民が受け入れられる方策への首相自身の見通しなしにうまくいくはずがない。

先の見通しを欠いた時間稼ぎは、米国の不信を高め、沖縄の怒りをつのらせ、しかも肝心の移設は何一つ解決しない最悪の結果を招きかねない。煮込んだあげくに形もなくなるような首相のリーダーシップはごめんだ。

< 赤瀬川原平 (1937-) >

本名赤瀬川克彦。前衛美術家、随筆家、作家。純文学作家としては尾辻克彦というペンネームがある。神奈川県横浜市生まれ。武蔵野美術学校(現武蔵野美術大学)油絵学科中退。

現在、武蔵野美術大学日本画学科の客員教授。

千円札を肉筆で 200 倍に拡大模写した作品や千円札の表だけを一色で印刷したものに手を加えたものを作品とし発表し、通貨及証券模造取締法違反に問われ、起訴、弁護人に瀧口修造といった美術界の重鎮たちが名を連ね、話題となった。判決は「懲役 3 年、執行猶予 1 年、原銅版没収」の有罪。

著書に『オブジェを持った無産者』『櫻画報大全』『絵次元 あいまいな海』『追放された野次馬 思想的変質者の十字路』『夢泥棒』『肌ざわり』『お伽の国の社会人』『本物そっくりの夢』『整理前の玩具箱』など多数。

